

## 弔 辞

清原留夫さんの御霊前に、謹んでお別れの言葉を申し上げます。

12日の早朝、透さんから連絡を頂き、すぐ駆けつけました。留夫さんは、今にもいつもの調子でしゃべりだしそうな、穏やかな表情でした。悲しみと感謝の気持ちでいっぱいになり、言葉を失いました。留夫さんと私は1995年・平成7年に一緒に古賀町議会議員に当選しました。それ以来、25年の長きにわたってまさに苦楽を共にしてきました。会派制が始まったときは二人で新政会を結成しました。私の議長就任や市長選に留夫さんは欠かせない存在でした。

1期目、町議の時は楽しかったですね。議長選は10対10と拮抗した力関係の下、夜遅くまで何回も勉強会をやりました。当時800万円あった町長交際費を500万円に減額させ、道路新設改良費を増額させたこともありましたね。

留夫さんは、3期12年間議員を務めました。2期目、前田宏三議長の時には副議長として、3期目、小山利幸議長の時には議運の委員長として腕をふるいました。誰にも気軽に声をかける人柄で議会をまとめられました。

その役割は今こそ必要な時ですが、容易ではなく、改めて留夫さんの存在の大きさを痛感します。8月のお盆前、久しぶりにお会いしましたね。体調がすぐれないとのことで、早めにお暇しようとしたのですが、気が付いたら1時間半も経っていました。

留夫さんは、部落解放運動のこと、美明開発やししぶ駅、公民館建設などを振り返り、「思い残すことはない。母ちゃんや子どもに囲まれ幸せだ。家族には延命治療はいらない、この家で死にたいと伝えた」と、清々しくお話してくれました。

そういえば、昨年11月、在宅医療講演会を行いましたね。留夫さんが命の恩人と尊敬する大岩俊夫先生が代表の「地域医療と市民を結ぶ会」の主催でした。留夫さんはその会の副会長でした。留夫さんは、在宅医療は若いもんが学ばなくては意味がないと、透さん御夫妻と一緒に参加しました。留夫さんは学んだことを身をもって示され、自宅で最期を迎えました。

留夫さんは90歳になってもインターネットで議会の様子を、しょっちゅうご覧になっていたそうです。お盆前の会話の中で、留夫さんは、鹿部区画整理組合の経験から、古賀駅周辺開発なども決して簡単ではないと声を振り絞って話されました。お金のやりくりの苦労話も初めて聞かされました。

「お父さん、そんなに大きな声で話さなくても」と奥さんが途中で心配して声をかけるほどでした。

「思い残すことはない」という留夫さんにとって、おそらく今後の古賀市が気がかりだったのでしょう。

私に対しても、奴間くんは俺と違って運がないなあ、しかし、このままではもったいない。笑いたくない時も笑い、言いたいことがあっても時には黙って柔軟になったらどうか、すべては市民の為だ、と歯に衣着せぬ言い方で諭（さと）してくれました。

今となっては、留夫さんに直接返事はできません。

しかし、きょう弔辞を述べられる田辺市長や古賀議員と協力して素晴らしい古賀市を作っていくことをお誓いします。安心してください。それが弔辞の指名をされた留夫さんへの私の返事です。

留夫さん、天国から静かに私たちを見守るのは退屈かもしれませんが、どうかゆっくり休んでください。会話の続きは、今後も、奥様や透さんたちと交わさせていただきます。

清原留夫様。本当にお疲れ様でした。そしてありがとうございました。

2020年・令和2年10月14日

古賀市議会議員 奴 間 健 司